Salamander in the circle

第二十章　冥界の巨人

峯村　明

Salamander in the circle

第二十章の登場人物		
ダーヴェ	……	学術調査団の団長
ヒューダー	……	学術調査団の団員
イリチヤ	……	ヒューダーが名付けた少年
ヘルガ	……	エウメロス王国の王女
スクナ	……	世界の果ての島の王に仕える者 コタエの兄
バイスロイ	……	黄金門の皇帝の息子
ソルド	……	ケストル人警備隊長

これまでの主な登場人物

ネウトラ評議会	ヤスウ	学術調査団の団員
	ハイヤーン	本部科学者のリーダー
	ティコ	科学者
	ナシル	本部・事務職員
エウメロス王国	レル・ヴァリス	王室付近衛隊長
	ヴァリス将軍	レルの父
	カール	王子　ヘルガの弟
	ロウナス	国務省の高官
	アンテロ	レルの副官
	摂政	亡国王の弟
ケストル王国	パウル	国王
	ウルリク	第三王子
	ヘンリク	ウルリクの息子
	ホペオクー	ケストル人の美女
黄金門市	皇帝	皇帝
	パソネル	バイスロイの参謀
異界	異界王	異界の王
	ベネトナシュ	死神
	テクトリ	最下層ミクトランの主

世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長　マミヤの父
	オマキ	ホシナの妻
	マミヤ	ホシナとオマキの娘
	キト・コマ	ホシナ族の男たち
	ゴン	ホシナ族の男　（ヤサカオ族出身）
	サノヒコ	王に仕える役人
	アマセオ	シトリ族の後継者だったが追放された
	カガセオ	アマセオの弟
	ヤサカオ	ヤサカオ族の族長
	チドリ	アマセオの妻
	ハマツ	チドリの養父
	タマシギ	ハマツの実子
	オモイカネ	王に仕える者　日読み
	フツヌシ	王に仕える者　将軍
	ミツハ	メッサナから亡命後のメルノの偽名
メッサナ市	パンテオラ	メッサナ市の総督
	コモラ	総督の顧問
	バラム&バランケ	双子のジャガー　パンテオラの部下
	メルノ	音楽家
	パルダリス	メッサナ市総督家の一人　総督代理
	メンドルブ	メッサナの化学者

目次

冥界の巨人
316.
317.
318.
319.
320.
321.
322.
323.
324.
325.
326.
327.
328.
329.
330.
331.
332.
back number
第二十章のあとがき
奥付

冥界の巨人

316.

「ひとまず、ようこそミクトランへ、と申し上げましょうか」
　黒マントの男はフードを脱ぎながら言った。声と同じく目は生き生きと明るい。冥界最下層にはまるでそぐわなかった。
「わたしはダーヴェ。そう、ネウトラ評議会の者です」

　バイスロイが名乗ろうとすると、ダーヴェは、つと手をあげて遮った。「あなたがたが何者か、当ててみせましょう。黄金門の高位の方々。どうです、違いますか？」

「いや。違わないが」

　ヘルガはバイスロイが面喰う表情を初めて見た。

　黒マントのダーヴェは嬉しそうにうなずき、「こちらのケガをされている方は……そうだよバラム、そおっと降ろしなさい……もしや……いや、かの国は国名を公表していない。口にするのはやめておきましょう。でもおおかた、そうでしょう？　この装束はあの国独特のものです」床に降ろされて仰向けになったスクナの額に手を当てて言った。「そして、あなたがたはケストルから来たのですね」それは質問ではなく、断定だった。

　バイスロイは頭を振りながら言った。「なにもかもお見通しというわけか？」かなり不快げな彼をヘルガは心配顔で見守る。

「黄金門の方」、とダーヴェ。
「名はバイスロイである。そう呼んでくれたまえ」
「では、バイスロイ。確かめさせてください。あなたがた三人はケストル闘技場からここへ来た。間違いありませんか？」
「うむ。間違いない。ただし、そのケストル闘技場はもう存在しない」

　そのひとことはダーヴェの想定外のものだったのだろう。あきらかにショックを受けた様子の彼を、バイスロイは満足した様子で見ていた。ようするに、と、ヘルガは観察した。バイスロイは己が主導権を握ることに満足を覚えるらしい。

　ダーヴェは余裕のある態度を一変させ、表情をこわばらせた。「なにがあったのです？」
　だがバイスロイはその辺の事情に疎い。そこで彼はヘルガを振り返った。ヘルガは進み出、ケストル王国北方にあった氷河湖が決壊し、王国土を襲った全貌を語った。

317.

「氷河湖決壊の引き金になったのが評議会の無人偵察機だというのですか！」

「偵察機がケストル北方で行方不明になったとわかった、その時点で、氷河が崩れる可能性を、黄金門の皇帝陛下は指摘されました」

「――偵察機は評議会の中性子爆弾製造に関わっていた、と？
――なんということだ――」ダーヴェはがっくりとその場に膝をついてしまった。

「ダーヴェ様」ヘルガは彼の傍らに膝をついた。「評議会の爆弾製造に至るいきさつ

に、大きな懸念を持っていた人がいました。その人のおかげで、評議会からの正式通告だけではうかがい知れない、内輪の様子をあらかた知ることができたのです。ヤスウというひとですが……」

「ヤスウ！？」うなだれていたダーヴェは弾かれたように顔を上げた。

＊

　意外にも、ダーヴェはメッサナ市が封鎖されたことを知っていた。「時々、バラムが偵察にでていたんです。メッサナの住民はふつうにジャガーをペットにしていますから、バラムが街中をうろついても怪しまれることはありません。夜中ならなおさら」
「しかし――そうですか、ヤスウはメッサナに来ていたのですね。そして運悪く封鎖に遭ってしまった」

　立ちっぱなしで腕組みをして彼らの話に耳を傾けていたバイスロイも腰をおろした。
「訊きたいのだが。ここは場所からいってどのあたりなのだ？　メッサナに近いのではないかという気がするのだが」
「ええ。まあ。近いと言えば近いし、遠いと言えば遠いといいましょうか」
「……なぞなぞか？　そんな気分ではないぞ」
「いえ、言葉通りなのです。ここは冥界。この世の場所ではない。ただ、場所を特定するならば」、とダーヴェは人差し指を上に向けた。「天の川に対応しています」
「天の川――？」
「ええ。それも天の川の暗黒星雲の部分に。メッサナが夜の時はメッサナの真下に位置します。メッサナが昼の時は別の場所に移動します」
「そんなばかな――」
「まったく。想像を絶するとはこのこと」

318.

　バイスロイをぼう然とさせておいてから、ダーヴェは考え込んだ。
「そうですか、ケストル闘技場のステーションはもう使えない――それどころか、ケストルそのものがすでに――」

「ケストルの人たちには一応避難の勧告をいたしましたわ。どれくらいの人が生き延びられたかはわかりませんけど」ヘルガは言いながらスクナの頭を自分の膝にのせた。スクナは恐縮しまくり、バイスロイの目つきはもしかしたら羨ましげに見えた。

「実はですね……ここにはかなりのケストル人が入りこんでいるんですよ……」
「――どうやって！？」
「まあ、あなた方が使い、私自身も使った闘技場ステーション、あそこからです」
　ふん、とバイスロイは鼻を鳴らした。「あの場所は極秘だったらしいが、ケストルの軍人の規律の緩さからすれば、秘密でもなんでもなかったのだろ」

「ええ、それもありますけど、ステーションに入るにはパスがいるんです」
「？　我々は簡単に入ってしまったが？」
「ひとりでも有効なパスを持つ者がいれば、ある程度の人数は同行できるようなんです。あなたがたの場合、『黄金門の血』ですね」
「私か」
「はい」
「では、そのかなりの人数のケストル人が入りこんでいるというのは？　やつらはどうやって？」
「それは、わたしの場合、コレだった」ダーヴェは左腕を掲げて見せた。「さきほどスクナさんが言われた。『評議会の身分証』。コレがパスだった。ケストル人はこれをや

りくりしてここへ入ってきた」
「……誰かの身分証を勝手に使ったということか？」
「そういうことです」

　バイスロイはひどく疑わしい目でダーヴェを見やった。「そんなことがありうるのか？」

「もちろんめったにあることではありません。が、不幸にして起こってしまった」

319.

　ひゅっと長棒が一回転して方端が地面についた。地面には十人くらいの人間が転がっている。全員、ケストルの軍服である。長棒の持ち主はふう、と息をついた。が、呼吸はまるで乱れていない。
「これじゃあ、キリがないよ。ねえ、ヒューダー、いったいいつまで続くの？」

　声をかけられたヒューダーは返事をしなかった。何かに気を取られている。

「どうしたの？」

「また誰か来たようだ」ヒューダーの視線の先にはうずくまったジャガーが頭をもたげ、耳を動かしている。体は深い黄色の地に黒の斑紋がある。「バランケ！」とヒューダーは呼んだ。「来い。帰るぞ」

「こいつらはどうする？」

「放っておくしかあるまい。送り返す方法がみつかるまでは」

「ここにいたくてやって来たんでしょ？　それこそ放っておけばいいじゃんか」

「本当に来たかったんならな。が、後悔して帰りたいが方法がわからず、焦りと失望で暴れる者の方が多い。そして、なまじ放っておけば十日とたたずに人間ではなくなってしまう。だからこっちは親切で気絶させ、眠らせてやっているんだ」

　イリチヤは黙っていた。

　ケストル人が転送システムを使ってミクトランへ進入するようになった発端は、ヒューダーにあったのだ。

「でもそれって……ヒューダーが悪いんじゃない。いろんな人の命がかかってた。エウメロスの王女様とか。マミヤとか」

「それはそうだが……」

　闘技場に引き出され、評議会の身分証を奪われたヒューダーであった。

320.

　それが『魔法のカギ』だと気づいたのは警備隊のソルドだ。
　闘技場警備隊長である彼は、ウルリク王子がどこからか巨人族を受け入れ、また送り出しているのを盗み見、跡をつけた。そしてステーションをくぐり、また戻ってきたのである。ウルリクの様子をうかがったり、カマをかけたりするうち、ウルリクにはステーションを通過できないと知ったソルドは、なぜだ、と考え、やがて気がついた。王族ウルリクになくて自分にあるもの、それは評議会の人間から取り上げた身分証だ。彼は何度か闘技場とミクトランを往復した。

　その目的は――物見遊山だった。彼は仲間に声をかけ、現世と冥界とを行き来していた。いたって興味本位なものだったが、経験者は仲間の間では大きな箔がついたのだった。中にはいずれバチがあたるぞと、そのような行為をやめるよう諭す者もいたが、相手にされなかった。

ソルドの、闘技場−ミクトランの往復が正常に成立していたのは初めの数回のみだった。帰ろうとしても跳ね返されてしまうのだ。
おそらく、巨人の大群という大質量を頻繁に幾度も移動させたため、システムの力場に過重負荷がかかり、正常に動かなくなったのだろう、とダーヴェは考えた。ケストル人はミクトランまで来たものの、帰れなくなってしまった、というわけだった。

帰れなくなった者のなかにソルドがいた。彼は同じ境遇の仲間から恨まれ、彼自身は身分証の元の持ち主を恨んだ。きわめつけの逆恨みであった。

そんなわけで残留ケストル人は、はっきりしないが、数十人はいるようだった。なぜはっきりしないかといえば、一人、二人とちりぢりになり、ちりぢりに潜伏してしまったからだ。誰が生存しているかもわかっていなかった。そもそもミクトランという場所ははかり知れないほど広大で全貌はつかみがたく、生来、我が強いケストル人は困難に対して一致団結して乗り越えようという発想をもっていなかったのである。そして、ヒューダーが言ったように、目覚めた状態で十日もこの地の特殊な磁場に心身をさらせば、彼は人間ではなくなってしまう。冥界の住人となるのだ。

321.

イリチヤの姿を見たとたん、ヘルガは膝の上のスクナを忘れて立ち上がろうとした。気がついたときにはスクナの頭は滑り落ちていた。

「ああっ！！　あ、頭が―！！」

「ご、ごめんなさいごめんなさい！！」

「王女さま！　こんなとこでお会いできるなんて！」

「なんとイリチヤはヘルガさまと知り合いだったんですか！」

「ほお？　そなたが身分証をとられた大バカ者か」

「――オレにケンかを売るとはいい度胸だ」

「ヒューダー！　ケンカ売っちゃダメです！　そのひとは黄金門のお偉方ですよ！！」

「頭が―！！」

「スクナさまごめんなさい！　イリチヤ元気だった！？」

「がう～」

「ごろごろごろ」

322.

「ところで」

　再会と初対面の儀式がひとしきり騒がしく行われた。バイスロイの華麗な服装はヒューダーに胸倉をつかまれたために若干乱れていたが、ヘルガがそっと直してさしあげた。このプライドが高く、権力慣れしている男にへそを曲げられるとやっかいだと、彼女は気がついていたのだった。

　こうして威厳がとりつくろわれたところで、バイスロイは立ち上がり、片手を腰にあてて言った。

「ところで、ここに十日間いると私はここの住人になる。すなわち死人になる。そういう認識でよろしいか」

　この問いに、先に来た者たち、ダーヴェ、ヒューダー、イリチヤが顔を見合わせるのをヘルガは見た。そういえば、この人たちは十日どころか何か月もここにいるはずではないか？　すると、ダーヴェが気楽な調子で言った。「いえ」、と。

「……どういうことか」バイスロイは、ダーヴェの軽さとは波長が合わないと感じ始めていた。

「この区画は安全なんです。わたしが結界を張って囲ってありますからミクトランの影響は受けません。それでみなさんにここへ移動していただいたんです」

「なるほど……しかしだ、その結界とやらはいつまでもつのか」

「ええ、それなんですが、わたしが死んだらおしまいですね。はっはっはっ」

「……」

「おっとこれは失礼、まあ、なにしろ笑ってないとやってられないもんですから。ひとつ困ったことがありまして」ダーヴェは態度を改めた。「残留ケストル人たちが結界の存在に気がつき始めたようでして。襲撃される恐れがある。そのために数日ごとに場所を移動しているのです。厄介と言えば厄介です」

「まったくだな」バイスロイはちらりとヒューダーに視線を投げた。「で、私が訊きた

いのは、だ、我々は現世に帰ることができるのか、ということだ」

　ダーヴェの面が曇った。ヘルガはこの質問に対してその表情はやめてほしいわと思った。笑い飛ばしてもらった方がましだわ。

323.

「転送システムが正常に動いていれば。ケストル闘技場のステーションが健在だったら。言っても詮無いことですが、もしそれらが正常通りだったらすぐにでもお帰りいただくところです」

「ダーヴェどの、先刻、貴公、ジャガーを偵察にだしていると言わなんだか。ということは地上に出る手段があるということではないのか！？」

「それはですね……」ダーヴェは咳払いした。「冥界が天の川の暗黒星雲に対応している、そのことを思い出してください。つまり暗黒星雲が上空にある夜間ならば地上にでるのは可能なのです。なのですが。それに適した場所は地上ではただ一ヵ所。あとは絶海の孤島、深海、深山あるいは幽谷だったりします。ただ一ヵ所とはすなわち……」

「――メッサナ――」

　まじめな顔でうなずくダーヴェである。「メッサナでよければいつでもお帰りいただけます」

　さすがのバイスロイも言葉もなく天を仰ぐのだった。

324.

『転送システム』がかつてどのようなメカニズムで動いていたのか、知る術はないとダーヴェは言う。

「巨大なエネルギー源が必要だったはずです。エネルギー源は磁場を伴います。
　この最下層には網目の結び目が複数存在する。もしかしたらここは網目の起点か終点、あるいは分岐点だった、つまりターミナルだったのかもしれない。ゆえに巨大な磁場を伴っている。人間には有害な磁場です。システムが本来の正しい使われ方から外れたために磁場は歪み、死者の国ミクトランを造ったのではないかと……まあ、わたしの空想にすぎませんが……」

「分岐点と言いますと……それらがどこへ繋がっているのか、わかっているのですか？」尋ねたのはヘルガである。

「ある程度は。そのひとつがスクナさん、あなたのおくにと繋がっています」

「まことか！？」

「実はわたし、そこからここミクトランへ来たんです」

「さらわれたマミヤを追ってきたのだな」、とヒューダー。

「そう。マミヤはすぐにケストルへ送られ、わたしはこっそり跡を追いました。転送システムは人によっては心身に負担がかかるようで、彼女はなにも覚えていませんでしたが」

「すると――うちのくには死者の国と繋がっていると！？」

「つい最近までは。わずかな間に壊れてしまい、今では繋がっていません」

　スクナは複雑な表情を浮かべた。くにと不吉な世界との繋がりは切れたが、彼自身は帰れないということだ。彼の体を支えている斑のバランケが首をひねって彼の顔を見上げた。黒いバラムの方は結界の外で歩哨を務めている。

「ダーヴェ先生」組んだ指の中に鼻先を埋めていたヒューダーがつぶやく。「巨人族とステーションはなにか関係があるんじゃないか？　ひょっとしてシステムの建造者？」

「――それはまた大胆な。番人だった、くらいなら考えられますが」

　ヒューダーはそのまま黙って何事か考え込んでしまった。

「ダーヴェどの」生還の可能性の低さに呆然自失していたバイスロイは、巨人族の話題に聞き耳をたて、ダーヴェに話しかけた。立派な体格と腕力で胸倉を掴みにきたヒューダーのことは敬遠している。

「その巨人族、ここミクトランから世界中に送り込まれたということなのか」

　ダーヴェは上目づかいにバイスロイを見て、うなずいた。

325.

　スクナが歩けるようになってから、一同は居留地を移動することになった。前夜、ダーヴェとヒューダーとは地図を前にあれこれ議論した。ミクトランとは、ようするに、異次元の世界。地図があること自体あり得るのかとバイスロイは思ったのだが、ダーヴェは過去に移動した場所とルートとを几帳面に書き留め、マップ化していた。それを見ると、基本的に南北方向に長く、かなり入り組んでいることがわかる。その地形はヘビやカエルの形に似ているようだった。

「この地図がミクトラン全体の何割くらいに当たるのか、まるでわかりません。一割かもしれないし、九割かもしれない。しかしこのどこかに巨人族を生み出している場所がある。一刻も早く、そこを確定したいんですがねえ、今までお話してきた通り、連続十日以上生身の身体をさらすとこっちが死んでしまうし、ケストルから入りこんだ人たちへの対応もあって、なかなか」

　ダーヴェは頭を振り、バイスロイは憤慨した。

「勝手に進入したケストル人など放っておけばいいではないか！！」

「そうもいかないんです。放っておいて、ただ死ぬだけではないんです。彼らは死んでからミクトランの住人になる。すなわち、冥界の怪物と化し、我々を襲うのです」

「――たまらんな――」

「まったく。しかし、イリチヤが来てくれて、ケストル人の活動をかなり抑えてくれている。おかげで最近は探索の方もはかどりつつあります」

イリチヤ？　あの小柄な少年が？

小柄な少年はヘルガと尽きることなく会話に高じていた。彼らの傍らでスクナはただ話に耳を傾けていた。

326.

（見れば見るほど、あの娘に似ている……）

髪色も目の色も対照的なほど違うが、顔かたち、背格好、雰囲気までが他人とは思えないくらいそっくりなのである。スクナは「兄弟姉妹はいないか」とミツハに尋ねたことがある。イリチヤのことが念頭にあったからだ。しかしミツハは自分は四人姉妹の末っ子で、一番近い姉とは二十歳も歳がはなれているのだと言った。もっとも、それはミツハの中のメルノに関することであるとは、スクナは知らない。

（しかし……あの娘も不思議なところがあったから……そうっとしておこう。なにしろ、生きて帰れるかどうかわからんのだし）

余計なことを耳に入れない方がよかろうと、スクナは思ったのだった。

327.

居留地の結界を解いたところで彼らはいきなり襲われた。

「ここで会ったが百年目だ！！　尋常に勝負しろ！！　ヒューダー！！」

　大声でがなり立てているのは、懐かしのソルド。ついに出番はないかと思われたが、実に二百何十話ぶりの、思いがけない、たぶん誰も待っていなかった再登場である。

「なんだ、おまえまだ生きてたのか」

「やかましいわ！！　こんなことになったのはいったいどいつのせいだ！！」

「そうはいってもな。その腕輪には呪いがかかっていると、オレは言ったはずだぞ。おまえはそれを承知で持ち歩いていたんだろ？」

　もうちょっと違うセリフだったが、まあいいかとヒューダーは思った。ソルドのことだからとっくに忘れてるはずだし。ダーヴェと付き合っているとかなり気楽な性格になってくるのだった。

「の、呪いだと！」
「それは本当かソルド！」
「おのれは我々を騙くらかしていたのか！！」

　一転、ソルドの仲間は仲間で無くなった。

「ええい落ち着け！！　くだらん口車に乗ってどうする！！　こ、こんなもん！　こんな腕輪！　たたっ返してくれるわ――え？　な、なぜだ、外れん！」

　取り外せないアイテム。それは呪われている証。元仲間らは一斉に浮足立つ。

「ま、待ておまえらっ！　おまえらだけで逃げようったってそうはいくかっ！」
　ソルドは遠巻きにしている仲間から見捨てられる恐怖にさからえず、腕から腕輪を引

き抜こうとジタバタと足掻いている。外すには順序があるのだが、『呪い』のひとことに動転して忘れてしまったらしい。これでもかつては、いちおう、ケストルの軍の兵士だったのだ。見苦しいといったらなかった。

　うんざりしているヒューダーの前へ、人影が立った。

　人影はひとこと、「さがって」というと、手にした長棒をひゅっと一回転させた。ソルドの仲間たちは相手が小柄なので、なにごとだ？　と見ていただけだ。すると人影は、すうっと何気なく身構えたかと思うと、上段撃ち、回し打ち、中段突きの基本動作とその応用だけで瞬く間に悪者五人組を叩きのめしてしまった。

　それから倒れているソルドを棒でつつき、「ヒューダー、腕輪、今ならとれるよ、どうする？」

「いらん。そんなもん。欲しければおまえにやるぞ」

「ぼくもいらない。フケツそうだもん」

「さ、みなさん、出かけますよー」

　しかし、バイスロイは不服そうだ。「まったく。子どもに戦わせておいて大のおとなは傍観か？」

「ん？　だって、ダーヴェ先生もヒューダーも学者だもの。戦うのはぼくの役目。それに戦うといっても、ぜったいに殺しちゃダメなんだし、しろうとには難しいよ。やっぱりぼくがやらなくちゃ」

328.

　冥界最下層ミクトランの地面は、素材はいったいなんだろうと不思議に思うほど、歩きやすい。凹凸がなく、どこまでも平坦だ。それもそのはず、そこは物質としてはかつて惑星全土を覆っていた転送システムの一大ターミナルだったのだから。しかし今となっては全体像は不明である。システムのごく一部がそこに顔を出しているというだけだ。
　おそろしく広大なのだが、本来そうだったのか、次元の歪みでそうなったのかもまた、わからない。わずかにわかっているのは、最下層とはいえ、その中がまた幾層にも分かれているということだった。最下層の一階、二階、みたいな感じである。

「……ややこしいな……」ぼそっと不機嫌につぶやくのはバイスロイである。
「ええ、でもそうとも言えないんですよ、最下層一階にあるステーションは北半球各地へ繋がっています。最下層二階は同じ二階の中だけを移動できることがわかっています。おそらく三階があって、一階と三階とを二階が繋いでいるのでは。三階は南半球へ繋がっていると思われますが未調査です。今のところ一階、二階だけで手一杯というか」
「私たちは最初、一階に到着したのですね。それから『階段を使って』二階へあがった」
「そうですヘルガさま。その際スクナさんが歩行困難だったので、バラムの背に乗っていただいたというわけです。そしてどうやら、この二階部分だけは正常に動いているようです。今のところは」

　バイスロイは事前にマップを見せてもらったが、複雑な図形の間にあれこれ細かく書き込みがあって、ひとめで拒絶反応を起こしていた。ふだん細かなことは参謀に丸投げ

していたせいだ。見たところ、ヘルガはダーヴェの軽い話にも深刻な話にもちゃんとついていってる。原始人みたいな大男のスクナは黙って目を光らせているだけで、わかっているのかいないのか、わからない。イライラしているのはバイスロイだけのようである。イライラだけならまだしも、次第に気がめいって来たような気がする。半透明の黒い柱があちこちでうねりながら地面と天井を繋いでいる。そして天井はおそろしく高い。うねりの動きは気持ちを不安定にさせるらしい。時折、一握りくらいの黒い物体が音もなく空間を横切り、はっと我に返る。コウモリだという。

たしかに、こんな閉じられた世界に十日もいたら少なくとも気が狂うかもしれない。まずいぞ、と彼は思った。十日で死ぬという話に実感が沸いてきた。

329.

「われわれの任務は『基本的に』巨人族の学術調査だ」

　結界のなかでの小休止。ヒューダーは語りながらいつだったか同じ話をしたのを思い出す。あれは……エウメロスの城、相手はレル近衛隊長だった。レルは、ヤスウの願い通り、本来の王室付近衛隊の任に就いているということだった。だが、肝心のエウメロス王女本人は今、冥界にいるのである……

「巨人族は三万年前に絶滅したとされていたが、若干の生き残りがいた。険しい山地や森林の奥深くなど、人が近づけない、条件の厳しい地域に隠れるようにして。長年、定期的な調査は行われていたので、個体数も把握されていた。ところが、巨人族が居住地から消えてしまったという報告がいくつかあり、臨時の調査に乗り出した。その調査の真っ最中に、ダーヴェ先生は巨人族居住地からここへ飛ばされてしまったというわけ

だ」

「わたしがケストル闘技場で見たのは数百という数の巨人でした。しかし、世界中探したって、そんなにいるはずがない、明らかにおかしいのです。それとも、地上にはいなかったが地下にいたとか？　黄金門の方もご存知のように、地下には多くの巨大施設がありますから」

　すかさずバイスロイが口をはさむ。「『トゥランの洞窟』なら、黄金門が厳重に管理しているぞ。巨人など一体も存在せぬ」

　ダーヴェは敬意を込めて頭をさげた。「可能性のひとつとして挙げたまで。しかし、ミクトランはどうです？」

「……単に、伝説的世界だと思っていた。まさか、地上世界と繋がっていたとは知らなんだ」

　ダーヴェはもう一度、敬意を込めて頭をさげた。
「ケストル闘技場がミクトランと繋がっていました。おそらく、元からあったステーションの上に闘技場を造ったんではないでしょうか。だって、ほとんど闘技場の一部でしたからね。
　スクナさんの故郷にあったステーションはけっこうな山中でしたが、かつては重要な交易地だったようです。そういった場所が世界中に何ヶ所かあったのです。ステーションはうっかり踏み込んだ程度では作動しないのですが、ミクトランの方から引っ張られると別です。人やモノが忽然と消えてしまう。実際、ここには太古の王国がそっくりそのまま存在します。ステーションの真上に住んでいたらしい。住人がどうなったかはご想像にお任せしますが。ご希望ならご案内しますよ」

　バイスロイもヘルガもスクナもふるふると首を振った。ダーヴェは「ですよね」とう

なずき、
「問題は、巨人族がどこから来たのか、です。『トゥランの洞窟』でなければ、ミクトランで生き延びたのか、ということになります。しかしですね、ミクトランに長時間いると、どんな生物も心身が変形してしまうのだから、もし彼らがここで自然繁殖したのなら、本来とは似ても似つかない姿になっているはずではありませんか？」

　ダーヴェは面々をぐるりと見渡した。

330.

「あのーダーヴェどの」スクナが子供のように手を挙げた。

「俺のくにの巨人族、ダイダラボッチは食べ物を必要としなかった。近在の者たちは肉や野菜を供していたが、それはあくまで神聖な存在へのお供えとしてだ。だが、他国の巨人族は――違うのだろうか。ヘルガどのの話によると、巨人族らは肉食だということだが」

「スクナさん」
　ダーヴェは左手の指先を目の下へ持っていって、こっそり苦笑した。メガネを押し上げる動作が染みついてしまっているのだ。
「スクナさん、わたしは、現存する巨人族ひとりひとりを、現地で、この目で観察してきた者です。わかっているのは、あなたのところのダイダラボッチは非常に稀な存在だということです。古くから原住者との間に友好的な関係を持っていた。原住者は聖なる者と崇め、崇められた側はそれに応えた。ヒューダー、民族学者としてのあなたの見解もそういうことでしたね？」

　話を振られたヒューダーはうなずく。異議なし、というところだ。彼はそのままやり

過ごそうとしたが、手をあげて口を開きかけたダーヴェを遮った。「巨人ダイダラボッチと原住者との関係はもとより、スクナどののおくにはひじょうに興味深いところだった。もし、このトラブルが解決し、地上生還がかなったなら、オレはあの地で暮らしてみたいと思っている」

　スクナは、あ、と思った。ダイダラボッチと近年、おもに交流していたのはホシナ族。ヒューダーのいう『あの地』とは、たぶんホシナ族の郷のことだろう。そのホシナ族は政争に巻き込まれたあげく、もはや世界の果ての島にはいない。ホシナ族の郷もすでにない。そういうことをまだ話していなかったな、と……暗澹とそんなことを考えていると、

「失礼、先生。話の腰を折ってしまった。先を続けてください」

「では、えー、どこまで話したんでしたっけ、おお、巨人と人間との関係でした。本来、巨人族とは肉食なのです。ダイダラボッチが希だというのはそういうことなんです」
　ヒューダーがうなずいている。
「あの体を維持するために、動物を襲い、肉を食するという生活を巨人族は数万年、数十万年にわたって続けてきた。巨人族のその生来の性質を、あなたのご先祖は変えてしまったんです。凄い、としか言いようがありません。あなたが巨人族とは食べ物を必要としない、聖なる存在だという信念をお持ちになったのは、きわめて当然のことなのですよ。巨人族を変えたのはあなた方なのですから」

　ダーヴェの穏やかな視線を受け、スクナはしばらくぽかんとしていた。

331.

　しばらくの沈黙のあと、バイスロイは言った。「地上には今、数万という肉食巨人族が跋扈している。人間の力でどうこうできる数ではなさそうだな」

「まさしく、それです。いろいろ考えたのですが……もしや、アレではないかと……」

　全員の目がダーヴェに集まった。ダーヴェはまじめな顔つきで床に視線を落としている。

「メッサナ化学者集団がそういう技術をもっていた。公表されていない、秘密の技術……」

「なんだそれは」バイスロイがイライラとせっついた。　ダーヴェは目をあげた。が、どこも見ていなかった。

「生命を生み出すのです」

　みな、一人残らず、言葉を呑んだ。『生命を生み出す』？

「ひとつのサンプルがあれば、同じモノが造れる。メッサナの化学者の手にかかれば生命ですら例外ではありません。地上世界に数えるほどしかいない巨人族が数万体にも増えた理由が……ほかに考えられるでしょうか？」

「し、しかしだな」言葉に詰まりながらバイスロイは身を乗り出した。
「貴公、さっき、言ったではないか！　連中がここミクトランで生まれるとして、地上に現れたとき、太古の姿のままなのはどういうことかと！　何故ミクトランの影響を受けて怪物化しないのかと！！」

「おそらく」ダーヴェは指先で存在しないメガネをおしあげようとした。
「その危険性はあるのだと、わたしは思います。だから大急ぎで地上へ送り出していたんです。つまり、怪物化するとミクトランの手に負えなくなるのです！！」

332.

　ベネトナシュはホウキを担いでいる。ホウキ、である。死神の大鎌ではない。

「あんたにはぜったい、こっちが似合うよ」テクトリおばさんが意地悪くほくそえみながらプレゼントしてくれたものだ。ありがたく頂戴いたしておいたが、内心はもちろん大不満で大不快である。（い、いまにみていろ！）、とかつてのウルリク王子のような心境であった。

（そういや、ウルリクさまはどうしてるだろ。ひとしきり呼ばれてたよーな気がするけど、なにしろこっちもごたごたしてたし、どれ、ちょっと呼んでみよう）

　ウルリクはベネトナシュのコールに応答しなかった。それどころではなかった。手塩に掛けた離宮と闘技場と運命をともにしたからだ。

（あれーどうしたんだろ、ま、答えないもんはしようがない、ほっておこう。いやー……そんなことよりさあ……）

　ミクトランにはコウモリが放し飼いにされている。ペットとしてではない。テクトリはコウモリを己の感覚器官として使うことができた。コウモリの嗅覚、聴覚、視覚は彼女のものだったのである。ミクトランを縦横無尽に飛び回るコウモリたちは刻々とテクトリに情報を供給するのだが、テクトリはこれがうっとうしくてたまらない。
　コウモリが送ってくる情報はどうでもいいものばかりだった。多少大きさや色の違うネズミが広大な領土をちょろちょろしているというだけのことだったから、うっとうしいというのもわかる。だったら、スイッチを切ってしまえばよさそうなものだが……
　ミクトランは様々な意味でひじょうに重い。それゆえ、冥界の土台となっている。ミ

クトランで起こった異常は冥界全体を揺るがしかねないし、そんなことが起これば責任を問われるのだ。
　テクトリは、「このあたしが冥界王さまに責任を問われるなんてありえないわ」と高をくくっていたが、それでも、一応、情報招集のアリバイだけでも作っとかなくちゃというわけだった。

　そして、冥界王のところを追い出されてきたベネトナシュなら、「こういう仕事にぴったりじゃないの」、ということになったのである。ベネトナシュもおざなりな仕事であることはテクトリの態度からわかっていたから、いやいやひきうけたのだったが、しかし、どうでもいいネズミの中に見知った顔を見つけてしまったら、話は別である。

　ホウキを担いだベネトナシュが見つけてしまった顔見知りとは。かつて彼が『戦い方』をプレゼントした人間だ。

第二十章『冥界の巨人』
第二十一章へ続く

back number

第一部

『第一章　世界の果ての島』
はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。
ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章　破滅の襲来』
調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章　変態』
エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチヤ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。
※・サブタイトルについて。
オタマジャクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章　レムリアン・ラプソディ』
ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章　メッサナ』
エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章　脱走巨人』
ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半。レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章　メッサナからの逃亡』
知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。
同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章　IRITIYA』
人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々とを恐怖に陥れようと画策していたのだった。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。
一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章　原子の火』
のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。
メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。
2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く　-原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章　二極世界』
死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。
並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章　天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。
ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。
そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章　機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激烈な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。
一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章　アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。
シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。
報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。
この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。
アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。
ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章　ヤサカオ　立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。
死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようと考えるが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンはヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章　ふたつの北極星』
かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス−死神と対決する決意を固める。
一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。
オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。
はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章　トゥランの七つの洞窟』
冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買い、ついに見放される。
一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起こり、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

『第十七章　ブルー・マーキュリー遭難』
巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門の皇帝は、評議会には専門家がいないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。

『第十八章　王女の冒険』
ケストル王国に向かったスクナとヘルガは、途中、アマセオと出会う。彼はホシナ族と行動を共にしてきたが、ホシナ族が安全な場所で逗留中、単独行動をしていたのだった。スクナらが大任を負っているのを知り、アマセオはケストル北方へと偵察にむかう。
ケストル王パウルと対峙し、国民らに避難を呼びかけたヘルガはバイスロイが王都にいないことを知る。彼は離宮へ招待されていたのだった。ヘルガにはおぞましい記憶の残る場所だったが、バイスロイ救出に急行する。しかし王都よりずっと北にある離宮は決壊した氷河に呑まれようとしていた。

『第十九章　ミクトランへの道』
ケストル闘技場からエウメロス地下シェルターへ移されたアマセオ。レル・ヴァリスは彼自身が保管していた闘技場の見取り図とアマセオが持ってきた情報が一致していること、そしてかつてダーヴェのメガネを解析したコタエの記憶から、ケストル闘技場には巨人族が出入りしていた機構があることに気づく。一方、破壊されつつある闘技場地下にある渦に飛び込んだバイスロイらはどことも知れぬ場所に到達。バイスロイは到達地の特徴から、それが太古に失われた転送システムであると知る。

第二十章のあとがき

第五部突入です。
お久しぶりの人たちが再登場。ダーヴェ先生は＃１以来、ヒューダーは＃86以来、イリチヤは＃170以来、ソルドは…ま、この人はいいか。
＃170にて、イリチヤはヒューダーに呼ばれて冥界へ向かいましたが、その後彼らが何やってたかというのは、筆者も知りませんでした！　そーいうことだったんですね！

さて、アステカ神話の神々というのは、見た目もすることも、ほんとにおどろおどろしい。スペイン人は『異教の神々はすなわち悪魔である』という解釈をしたあげくの壮絶な侵略に至るのですが…ベルナルディーノ・デ・サアグンの『ヌエバ・エスパーニャ概史』（『神々とのたたかい　1』・『アンソロジー新世界の挑戦』に収録）にアステカの神々の祭祀について細かく載っています。神話や伝説ではなく、現地でじっさい行われていた行為。悪魔の所業と解釈するのも無理からぬ、というか。
それにしても、という気持ちになります。いったい、なぜ？　という疑問。なぜ、こんな儀式が行われるようになった？
答えはたぶん、永遠に見つからない。もしかしたらスペイン人が破壊し尽くしたもののなかにあったかもしれませんが。

2023年7月12日　記

奥付

Salamander in the circle
　第二十章　冥界の巨人

2023年7月20日 初版発行
著者　　峯村　明　E-mail　blog　D & R
表紙素材　「月とサカナ」
制作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社